

座談会
エコノフォーラム

「旅と観光をめぐる」



橋本圭司さん
1999年卒業



野村宗訓・教授



中麻優子さん
2010年卒業



市川文彦・教授



御子柴嵩さん
3年生



増永俊一・教授



中須賀麗菜さん
3年生

増永 本日は卒業生お二人にお越しいただきました。(㈱阪急交通社にお勤めの橋本圭司さん(1999年卒)と堺市役所にお勤めの中麻優子さん(2010年卒)です。どうぞよろしく願っています。では、簡単に自己紹介をお願いします。

橋本 野村先生のゼミ1期生として1999年に卒業し、卒業後は阪急交通社で13年ほど勤務しています。入社以来『トラピックス』という通販で旅行を販売する部署でツアーの企画をしています。これまでアジア、中国を専門に担当し、現在はヨーロッパを担当。部下たちが作っ

たツアーの企画マネジメントをしています。経済学部の校舎に入ったのは卒業以来ですが、変わってなくて懐かしいです。

中 法学部を3年生で卒業し、ジョイント・ディグリー制度を利用して4年生から経済学部に入學し、市川先生にお世話になりました。2010年に卒業後、他社で1年間勤務し、2011年の4月から堺市役所の文化観光局国際部アセアン交流推進室で勤務しています。大学のときから国際交流には興味がありました。

増永 また、本日は異文化体験や観光、旅行に関心がある2人の学生にも来てもらいました。

あるテーマを前にしたとき、1つの方向からのアプローチだけではなく、さまざまな角度からのアプローチを考えることは大切です。難しく言えば“学際的考察”へのチャレンジであり、“複眼的思考”の試みでしょう。

今回の座談会は、今号の特集テーマである「旅と観光」をめぐる、文化的側面と経済的側面の両面から意見を交わすものです。日本が直面している産業構造の変化や観光立国の可能性、文化の創造と再発見の大切さなど、内容は多岐にわたり刺激的です。

ゲストは、観光分野の企業と地方自治体の国際部門で活躍中の経済学部の卒業生と、交換留学や途上国でのフィールド調査を経験し、異文化体験に強い関心を持つ現役の経済学部生です。体験談を交えつつ、話題は社会や自治体の現場の状況や学生の意識の変化にまで及び、卒業生と在学学生、そして社会科学や人文科学を専門とする経済学部の教員が相互に自由に意見を交わしています。

“産官学”連携とも言えるこの座談会に、学生のみならずも誌上で参加するつもりでそれぞれのやりとりに耳を傾け、今後の経済学部での学びや将来の指針にいただければ幸いです。

御子柴 3回生の御子柴嵩です。林宜嗣ゼミの25期生です。2010年の夏から約1年間、交換留学でフィンランドのヴァーサ大学に留学しました。関学では文化総部ISA(関西学院国際学生協会)という団体に所属していて、国際学生会議というプログラムに参加して世界中の学生と世界情勢についてディスカッションをしたり、日本と韓国の学生を組み合わせた会議の企画運営をしたりと国際交流には強い関心があります。

中須賀 3回生の中須賀麗菜です。栗田匡相ゼミの1期生で、開発経済学が主専攻。中でもア

アジア各国の社会や経済について研究しています。昔から国内外の旅行が好きです。旅行好きな性格も栗田ゼミを選んだ理由の一つです。栗田ゼミでは、アジア各国の社会や経済の現実を肌で感じて学習するために、3年生の夏休みに途上国を訪れ、フィールドワーク調査を行います。私もこの夏ベトナムへ行き、農村調査を行いました。調査ではたぐさんのデータを扱いますが、データ分析をする際に必要となる統計学や統計ソフトの使用法なども同時に学んでいます。

増永 今回の座談会のテーマ『旅と観光』には交通手段などの経済的な面とツーリズムなどの文化的な面があり、さまざまな分野・要素が絡みあっているのではないかと考えています。私の専門はアメリカ文化ですが、現在はツーリズムにも関心を持っています。

橋本さん、中さんが、今の職業に就かれたきっかけは？

●学生時代の経験がやっぱり大切

橋本 学生時代は旅行が好きで、3・4年生のときには夏休みを利用してバックパッカーをやりました。「絶対に旅行業界へ」ではありませんでしたが、旅行会社に決めたのは、バックパッカーの体験が大きかった。さまざまな業界も見ましたが、最後は、旅行が楽しかったから仕事でも携わりたいという単純な動機でした。あと、「うちは若いときから旅行を作ることができる。旅行に携わりたいなら、うちに決めてくれたら

いいよ」と人事の方が言ってくれた。この誘いもやっぱり大きかった。関西に住んでいるので「阪急」という名前にも愛着がありました。

中 大学の学部選びの時から、学部で将来の仕事も決まってしまうのかなと思つて悩みました。いろいろなものに興味を持つてしまい、1つになかなか決まらなくて……。それが影響して関学でも2つの学部に行きました。在学中にいろいろなることを経験し、それで就職を決められたいいなと。いろいろやってみた結果、いろいろしてみたなど。自治体であればさまざまな部署があるので、いろいろなことに挑戦することができると思いました。

増永 阪急交通社の特徴は？

橋本 若い社員に何でもやらせてくれる環境があります。20〜30代前半ぐらいがトラピックスを動かしています。私も入社1年目からツアーを企画させてもらいました。「絶対に売れるので作りたい」と言えばできる。「面白い素材を見つけたから海外に出張行かせてください」と言えばどうぞと。現地を視察して、ネタを見つけて、それを基に売れるツアーを作ってくれればいい。要は自由なんです。自由には責任が伴いますが、自分で責任を取れる範囲であれば本当に何でもやらせてくれます。

増永 魅力的な職場です。机の上でこそそこそそツーリズムの研究をするよりは、現場に出ている方がいい。

橋本 今はデスクワークが中心で数字の管理ばかりやっていますが、旅行というのは娯楽です。ネタがないとだめです。中にこもつていてはネ

タを探せません。ガイドブックを片手に外に行つてネタを探す。この座談会の一週間前、イギリスの食事を中心にした出張に行つてきました。イギリスの食事は美味しくないのではなくて、素朴なんです。素材の味が生きているというか。昔と比べるとイギリスの食事も選択肢が広がりました。

野村 イギリスはユーロトンネルができてガラリと変わった。交通というインフラ整備で、以前と以後とは大きく違う。パブがカフェになった。アジアでも早く韓国と日本を結ぶ海底トンネルを掘るべきです。日本の重工系企業がドーバー海峡を掘ったのだから技術的にはできます。政治的問題や戦争の問題がありますが、ヨーロッパの戦争の問題なんでもっと古い。雇用も創出するし、それこそ観光も発展します。

中 私もいろいろな場所に行くことが好きです。最初に行ったのはインドネシア。この経験は自分には大きかった。しかもツアーではなくて、大学の研修で現地の大学生と交流することがメインでした。本当に楽しかった。また、市川先生に連れていってもらったウクライナへの旅も普通の旅とは違いました。まだそれほど海外には行ったことはありませんが、現地の方と交流することが、私にとつて意味があります。

●学生時代に感じたい海外のインパクト

増永 中須賀さんは2011年の夏にベトナムに行つてこられたばかりです。中さんのお話を

聞いてどのように思われますか。特に印象に残ったこととか？

中須賀 私も現地の人との交流は旅の楽しみみの1つです。ベトナムの農村では、英語が通じないので、都会の外国語大学に通う大学生4人にベトナム語と英語の通訳をしてもらいました。その大学生との交流が楽しく、想像以上に深く良い関係になりました。お別れのときは寂しくて、ゼミのみんなが日本に帰りたくないと思っただけでした。2011年11月に、通訳をしてくれたベトナム人の4人のうち2人が関学にきてくれました。嬉しいことでしたが、来られなかった2人のことを考えると、少し複雑でした。私たちとベトナム人の学生たちはびっくりするぐらい仲良くなれました。旅では、自分たちが知らない人たちと関わる事ができるという楽しみが素敵だと思います。

増永 御子柴さんは長期でフィンランドに行かれましたが、特に強く印象に残っていることはありますか？

御子柴 現地ではフィンランド人と一緒に生活する以外に、「エラスムス」というEUの国同士で学生を交換するプログラムがあり、その学生ともよく一緒に時間を過ごしました。やっぱり国によってお互いの価値観がこうも違うのだなということを感じていました。例えば、パーティーを企画すると「何時に来るか」という話から始まります。こういうところからも国民性がでます。お酒を一緒に飲み始めると、「日本人は働き過ぎだ」となって「いや、逆におまえら働かなすぎだろ」という議論になります。



野村 宗訓 (のむら むねのり) 教授、民営化と規制緩和、公益事業の規制改革、産業政策の日英比較を中心に研究。

お互いの価値観や人生観を交換する中で、お互いに学ぶところがあるというのは一番印象に残っています。

増永 フィンランドで交流を深める小道具として、日本から持っていったものが、刺身包丁。だったようですが、刺身を切って交流を深めることには成功しましたか？

御子柴 上手くいきました。フィンランドには食べ物を生で食べるという文化がなく、実際、危ないと思われるのですが、日本人がやっただんに危なくないと思うようです。それだけ日本の技術のレベルや食文化、清潔感を受け入れられているのかなと感じました。あまり知られていませんが、フィンランドは日露戦争がきっかけで独立を回復したため親日国で、日本文化

は人気があります。特に、寿司は店舗数もまだ少なく高級品だそうで大変喜ばれました。

●観光業の可能性と課題

増永 座談会のテーマを「旅と観光」にした理由の一つは、日本の産業構造が変わり、製造業が厳しくなってきた、旅や観光などのソフトな分野、サービス業というもので、何とか国を維持していく必要があるとよく言われるようになっていきます。2008年に設立された観光庁のホームページでも「観光は消費の増加や新たな雇用の創出する」と謳っていて、観光分野が今後の日本にとって重要なものとして位置付けられていることが分かります。

また、観光分野は産業としても裾野が広いという調査結果も出ています。例えば、旅行業、宿泊業、輸送業、飲食業、土産物業のように消費を刺激し経済効果も大きい。推計ですが、国内生産額972兆円の5.3%、51・4兆円、雇用効果は総雇用6、445万人の6・7%、430万人と、産業として大きく、21世紀のリーディング産業とまで書いています。

東北地方は東日本大震災で非常に大きな被害を受けました。その中でも観光業のダメージは大きく、観光業が東北地方にとって大きな産業だったということをおぼろげに感じました。

橋本 確かに観光分野の経済的な影響力は大きいと思います。ただ、観光分野に携わる人はこれから減っていくんじゃないかと思っています。それは、観光分野に携わる人の収入が一般企業に

勤める人に比べて総じて低いことが挙げられます。添乗員さんのなり手も減っています。阪急交通社に来てくれる添乗員さんも10年前から顔ぶれはまったく変わっていません。そのあたりが一番心配です。仕事は楽しいですが、収入的には他業種の方が良かったらうなとは思いますが、かつては、お客様からかなりチップをもらえたこともあり観光分野の給与体系は昔から高くはありません。

また、私は新入社員の面接もしていますが、男性の入社希望者が少ない。毎年1万人ぐらいのエントリーのうち、女性が6〜7割を占めます。一生の職にするには躊躇するのかなと思います。観光業にポテンシャルがあるのであれば、従事する人の給与体系がもう少し良くなっている必要があると思います。

●OUTからINへ

野村 今の橋本さんのお話から、やっぱり日本のトラベルエージェント（以降TA）はOUT中心で、INの方がどうなっているかが気になります。団塊の世代が減ればOUTは減る。若い世代はあまりTAのツアーに入らない。

私の専門分野からの話をする、今後、航空会社がLCC中心になって、LCCがTA機能をはたし、ネットから直接予約ができるようになる。もし、INで中国やインドなど人口が爆発的に伸びている国の人を日本に呼び込めるなら、TAの仕事は増えると思います。ただ、中国やインドのTAとの競争になりまが。実際、

阪急交通社では子会社化するとか、そういう動きはありますか。

橋本 確かにそういう動きはあります。今、私の上司が熱心に会社にレポートを上げているのは、中国の上海や北京に旅行会社をつくって、中国人の日本行きや欧州行き、アジア行きのツアーを飛ばすということなんです。日本人はヨーロッパに行くノウハウは持っています。それを中国人用に当て込み直すということです。

増永 OUTばかりではいけない。観光客を日本にどんどん入れる。利潤の追及という意味でもどういう取り組みがあるかをお聞きしていますが、そういう取り組みがすでに始まっているということです。

野村 今の話は大変批判めいているかもしれま



橋本 圭司（はしもと けいじ）1999年経済学部卒業、野村宗訓ゼミ。卒業後は(株)阪急交通社で勤務。入社以来、「トラビックス」という通販型のツアー企画を担当。これまでアジア、中国を専門に担当し、現在はヨーロッパ。

せんが、これは我々の大学もそうしなければならぬという話をしたい。出ていく方もいるけれども、受け入れる側ももっと弾力的にしなければいけない。海外に事務所を置いて「ここはいい大学ですよ。ここへ来たらこういうことができますよ」ということをしっかりPRしなければならぬ。われわれは中国やインドまで行かなければならぬわけでは

●第2次産業から第3次産業への移行

増永 さて、急な質問になりますが、中さんがお勤めの文化観光局という部署は何を目的とした部署ですか？

中 文化観光局は2011年に設立された新しい部署です。堺市の歴史・文化・観光資源を活用し、文化、観光、国際、スポーツの視点から地域を活性化することなどを目的としています。

増永 観光ということだと、対象となるのは日本人、外国人、両方ですか。

中 両方です。私の部署はアセアン諸国がターゲットです。堺とアセアン諸国の中近世からのつながりを活かし、文化、教育等のさまざまな分野で交流しています。

増永 経済的な波及効果、市の活性化が大きな目的であるということですね？ 堺市の観光の特徴は何ですか？

中 仁徳天皇陵古墳や刃物など、歴史や伝統を持っているということです。

野村 先日、堺市をはじめてまわりました。確

かに観光資源がたくさんありました。歴史があり、千利休の出身地でもあり、本当に売り物がたくさんある。ただ、関空と大阪市内の中間点にあるのに、なぜかアクセスが悪い。自治体はこれまで何をしてきたんだと感じざるを得なかったのも事実です。

一方、市役所の上の展望台にも登りました。そこにおられるボランティアガイドさんは非常に熱心でした。茶室もありインパクトがあったので、売りになると思います。

産業という観点から見たとき、工業化が進んでしまったために観光が後手に回ってしまっただ。第二次産業で飯を食っていけるという時代が長すぎて、それが足を引っ張っているようにも見えます。パーミンガムやマンチエスター、シエフィールドなど、バランスよくやっている事例が海外にはありますので、今後はそういったところを視察されるのも一つの手です。産業遺跡でも人は呼べますし、企業城下町だったところが廃れてしまったとしても、何らかのちで工夫を凝らせば人は呼べます。シエフィールドも刃物の町ですから、堺市と共通点はあると思います。

市川 余談ですが、私は昔、シエフィールドに住んでいました。

野村 シエフィールドを舞台とした『フル・モンティ』という映画、他には『プラス』と『リトルダンサー』という映画にも共通点があって、石炭の企業城下町がだめになって、どうやって生きていこうかという話です。観光と直結しません、まちづくりとかまちの活性化という意



市川 文彦 (いちかわ ふみひこ) 教授、比較社会経済史、市場史・流通史、近代フランス社会経済史を中心に研究。

味では参考になる部分があるのかなと思います。たくさんある観光資源をコーディネートするために新たに部署をつくったと思いますが、関空をつくった段階でなぜできていなかったのかというところがすごく気になります。

中 そうですね・・・

市川 今の野村先生のお話には同感。堺市は文化を誇ることができるのに、刃物や機械、自動車といったもので、これまで大きくクローズアップされすぎてきたと思います。シエフィールドの話が出ましたが、1980年代の『フル・モンティ』の映画が出た時期までは工業都市でした。国際競争力がなくなり廃れて、このままだとだめになる一方だから、第三次産業の大きなショッピングセンターをつくるなどをやっ

た。また、シエフィールド大学をリサーチパークのように再生した。結果、今は高所得者が住む街として再生した。20年前には考えられないようなリニューアルを果たしたんです。問題がすべて解決したわけではありませんが、今イギリスではシエフィールドは成功例として位置付けられています。刃物や鉄製品、スチールで有名な街でしたので、今でもその関係の土産物が売られています。堺市がいま抱えている問題とシエフィールドが克服してきた問題とは重なる場所があります。ぜひ、中さんもシエフィールド調査に行かれるといいと思います。

●旅と観光の違い
観光に必要な要素とは？

増永 市川先生はフランスがご専門。フランスといえばパリ。パリといえば観光です。フランスの場合、歴史的に見て観光産業はどのような流れをたどってきたのでしょうか？

市川 18・19世紀に交通インフラが整ったことが大きい。何といっても鉄道です。鉄道のネットワークができて、それでヨーロッパがますます小さくなった。もちろん鉄道以前から地続きですから、人やものの移動はありますが、鉄道によって空間的な距離、時間的な距離が縮まった。面白いのは、イギリス人がフランスの観光開拓に乗り出した。日本の上高地や軽井沢をイギリス人たちが別荘地やリゾート地として開拓したのと同じで、ニースやカヌを観光地化したのはイギリス人なんです。19世紀のフランス

やイタリア、日本のリゾート開発には、イギリス人が関わっている。なんでイギリス人かというところ、それは一番豊かだったから。大英帝国のパックス・ブリタニカの時代で、戦後、アメリカ人が世界中にアメリカ文化を波及したのと同じことを、19世紀には、イギリス人がその経済力をバックにいろいろなことをした。カトリックの巡礼地は中世からありますが、近代になってから、当時一番お金持ちだったイギリス人が世界中いろいろなところに行っていたのは観光の楽しみ、リゾートの拠点をつくっていく時代がありました。

野村 この辺では六甲山のゴルフ場が有名です。

増永 そこはイギリス人貿易商グループが1903年につくった日本で最初のゴルフ場で、名門です。サイン一つにもそのときの空気が残っていて、英語で書いてあります。「イノシシが入るのでここを開けないください」ということも英語で併記してあって、歴史を感じます。また、クラブハウスは関学のキャンパスを設計したヴォーリズの手になるものだそうです。

旅と観光は違って、旅というのは、必ずしも経済的なことを含まない。観光は、利潤追求もありますが、やはり必要な要素がいくつかあります。シアーズ (J.F.Sears) という人の Sacred Places (1989) という本があります。これは19世紀アメリカのツーリズム、ツーリストアトラクションを考察した研究書です。その中で、観光に必要な要素を整理している。お金、時間、交通手段、観光地です。また、ホスピタ

リティにもつながる安全と快適というのも大切です。

市川 つまりおもてなしです。

増永 そうですね。日本の場合であれば、温泉も一つの文化ですから、いい温泉があるのはホスピタリティにつながります。日本の観光が海外の富裕層に人気があるのは、ホスピタリティの質が違うからではないでしょうか。京都や奈良は、世界的に見ても優れたホスピタリティを持っています。

橋本さんは勤務の中で、観光に必要な要素として、実際の業務の中で強く感じることはありますか？

橋本 私たちの業界でツアーをつくるのに一番インパクトがあるのは交通の整備です。九州新



中 麻優子 (なかまゆこ) 2010年経済学部卒業、市川文彦ゼミ。在学中はジョイント・ディグリー制度で法学部から経済学部へ編入。現在は堺市文化観光局国際部アセアン交流推進室で勤務。

幹線ができたときは、ツアーのあり方がガラッと変わりました。今までは新幹線で福岡まで行って、バスでしか回ることができなかったのが、一気に鹿児島まで入ることができるようになった。ツアーに時間的余裕ができて、今までにない行程を組むことができた。日本人は新しいもの好きで、新しい乗り物ができたら乗ってみたいとも思います。九州新幹線で行くということもアイキャッチになります。

市川 博多に行くにも新大阪始発で鹿児島までで行ける「さくら」が混んでいます。みんな「さくら」に乗りたいんです。利便性以外にも新しい車体にも惹かれていいると思います。

増永 私も嬉しがつて一度乗りました。車内は木目調で座席の間隔も広々とした感じでした。JR九州のいろいろな客車を手がけた方がデザインしたそうです。

●アイキャッチと多言語表記の重要性

野村 インフラ研究しているもののまだ乗っていません…。橋本さんが言われたアイキャッチというのは私も気になっています。例えば、リパブル空港はもともと軍用でしたが、民間企業の不動産会社とショッピングセンターを経営している会社を買収しました。空港名はリパブルエアポートを「リパブル・ジョン・レノン・エアポート」にして、ロゴや看板にはジョン・レノンの自画像を入れた。さらにその下に above us only sky と書いてある。これは有名な『イマジン』のワンフレーズです。私はこれ

が好きで2回、訪問しました。本当にいいところ。空港の前にイエローサブマリンが半分潜っている。ホスピタリティの話にも通じ、行ってみたいと思うんです。

ゴルフ場の話に戻ります。多言語表示ができていなかどうかも重要です。中須賀さんは、ベトナムのどちらに行きましたか？ハノイかホーチミンか、あるいは違うところですか。

中須賀 ベトナムでの農村調査の結果を南北比較できるように、北部班・南部ゼミを半分に分けました。私は北部班でハノイへ行きました。4日間の調査は、ハノイからバスで3時間ほどのホアビン省タンラック群で行いました。

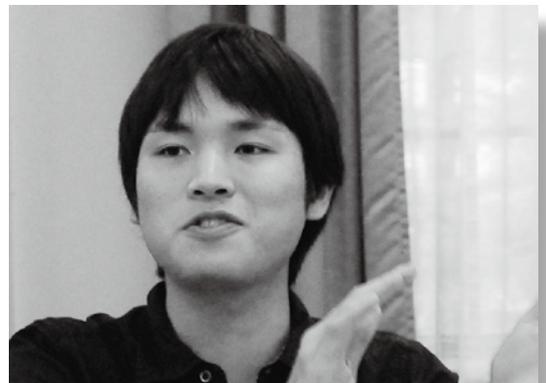
野村 ハノイは首都ですが、首都の空港で、正直「あれかい」と思ったはず。ベトナム近辺の電力はヨーロッパ型になっています。電線がつながって、物流も道路も南北回廊、東西回廊といって物流拠点としては機能している。そういう中で、空港は多言語表示できていたかということは分かりますか。

ちなみに香港は、英語、北京語、広東語の言語表示がありました。行政の窓口もおそらく多言語化されていると思います。これができてなければ行く気にもなりません。そのあたり、日本は遅れています。ヨドバシカメラが一番進んでいます。観光としては多言語表示と多言語アナウンスは重要です。ヨドバシカメラがやっているような多言語化を、空港・交通機関でできているか。市役所でも多言語化できているかというところがすごく気になっています。

中須賀 短い滞在だったので、はっきりと覚えていませんが、ベトナムでバイパスを走っていたときはHanoiという文字しかわからず、多言語表記はされてなかったと思います。

野村 御子柴さんにお聞きしますが、一方で、物流も人の流れも一体化しているフィンランドは多言語表示ができていましたか？

御子柴 フィンランドで使われている言語はフィンランド語とスウェーデン語です。マイナー言語なので表記は英語が中心です。また、フィンランド人は自分たちがマイノリティーだということをよく分かっています。空港などに行くこととスタッフの名札には、話せる言語の国旗が描いてあります。英語やフィンランド語、スウェーデン語、人によってはドイツ語やスペイン語を話すことができます。表記で分からない



御子柴 高 (みこしば たかし) 経済学部3年生、林宣嗣ゼミ。2010～2011年の1年間、フィンランドのヴァーサ大学に交換留学。所属する関学文化総部ISAが運営する国際学生会議で世界中の学生と世界情勢についてディスカッションをしたりと国際交流には強い関心。

部分は、人に聞けば分かるという体制は取っているのかなと思います。

野村 自分の国の国旗のマークを見つけて呼びかけたらいわけですね。

市川 北欧の場合、今は豊かだから世界中から人が来て、外交政策として移民の受入をやっているけれども、歴史的に見ると、昔は貧しかった。逆に人を送り出す側でした。一時はノルウェーの最大の輸出品は人間といわれているぐらいで、言語に対してセンチティブにならざるを得なかった。自国語だけでは世界に通用しないという経験を18・19世紀にしている。20世紀になってからは外から受けられている。言語の多様化に常に北欧はさらされています。

野村 大事なものは、それができている国家だから空港だから、また行けるという安心感があります。私も同じようなものをコペンハーゲン空港で見ました。びっくりしたのは、動くインフォメーション「iマーク」です。ポロシャツにiマークが付いていて、何でも聞いてと書いてある。ポロシャツを着たスタッフが空港の中を歩き回っていて、すぐに分かるようになっていて。これもホスピタリティにつながります。一人でも大丈夫だという安心感があります。

御子柴 国としても言語を大事だと思っっているみたいです。給与体系も、さまざまな言語を話せる人の給与を高くしています。能力給で、それがインセンティブになっていると感じました。

●動く九州「Air-Q構想」

野村 話しは変わりますが、観光でいうと九州が早く動いています。アジアの方をどんどん九州に入れ込もうというアイデア「Air-Q構想」といって、「Q」に九州の「九」を引っかけています。これをやると何が起こるかという、広域経済圏です。九州と韓国、中国が一体化する。インドシナや北欧と同じかたちになることを霞が関が認めるかどうかです。どこで入ってもどこで出てでもいい。Air & Railです。どこかに入ってきて、レールで動いて、どこから出ていってもいいよと。そして航空運賃をただにする。ただ、Air-Qという地域通貨を買ってくれと。約20万円分、九州にお金を落としてくださいというのを三菱グループがタッグを組んでやるうと思っています。もう動くと思います。

橋本 日本から出ていく動きですか。

野村 INがメインです。地域通貨で中国、韓国の方にお金を遣っていたということですが。

橋本 この前、徳島に旅行に行きましたが、徳島にも中国から人が結構入ってきています。また、高松にも中国から人が来ていて、祖谷のかわら橋や大歩危・小歩危は中国人だらけでした。日本人より中国人の方が多いいんじゃないかと。ダイレクトキャリア（直通便）を引っ張ってきて、向こうの人に日本の観光してもらおう。これは地域経済にインパクトが大きいと思います。

増永 観光に必要なものは、お金や時間、イン

フラなどですが、本当に日本が観光立国ということ意識するのであれば、もっと言語の多様化が必要です。それから、民間企業がいくら頑張っても、やはり政府や役所が動かないと大規模な産業構造の変革はなしえません。中さんがお勤めの地方自治体の責任も非常に重くなってくると思います。

●ツアープランの今後

増永 橋本さんは観光地としてのフィンランドにどのような印象をお持ちでしょうか。

橋本 観光地というより起点・経由地のイメージです。北欧のツアーでは、やはりノルウェーのフィヨルドが一番はじめにきてしまう。その



中須賀 麗菜 (なかすが れな) 経済学部3年生、栗田匡相ゼミ。アジア各国の社会・経済を研究。国内外の旅行好き。3年生の夏休みにベトナムを訪問しフィールドワーク調査実施。途上国の社会・経済を肌で感じながら学習した。

拠点として関空から飛んでいるダイレクト便は、ヘルシンキ行きのフィンランド航空しかないんです。北回りなので、ヨーロッパへの最短航路というかたちで売っていて、ヘルシンキに入って、乗り継いでノルウェーのベルゲンという街へ行きフィヨルドを観光する。そこを回って、またヘルシンキから帰ります。ヘルシンキに寄って、半日観光だけして帰るパターンなので、フィンランドは北欧のイメージの中に入っていないのが実態です。

増永 御子柴さんは、観光ではなく、10カ月間滞在されました。現地で生活していて、観光はどのような位置付けだと感じましたか。

御子柴 日本での宣伝通り、アジアから一番近いヨーロッパで、必ず立ち寄る場所ですよ。そこを意識し、航空会社などもテコ入れをしているようですが、橋本さんの言うとおりの観光地が少ない。観光は大事だと分かっていますが、観光地がないジレンマの中で、苦しんでいる部分はあるかなと思います。観光地はパッと見て分かるものですが、フィンランドは、自然の中で湖畔のサウナに入って、湖にザバンと入るといった満喫の仕方になります。これは、現地の人と一緒に生活しなければできないことで、観光ではどうしても盛り込みにくいと感じます。

野村 そこには反論します。異文化理解をする。これまでのありきたりのツアーはやめ、違うパターンをつくりたい。日本からのO.U.Tも掘り起こせない。誰かに連れて行ってもらえると

か動けない。そうではなくて、本当に質の高い観光を発掘する。そういう意味では、フィンランドには大自然があります。今までとは違うマニアックツアーを組みませんか。

増永 体験型ツアーですね。阪急交通社では、いま体験型がキーワードになっている商品はあります。

橋本 正直、団塊の世代の方、個人では絶対旅行に出かけないような方をターゲットにしているのがトラビックスという部署です。もちろん社内には違う部署もあって、個人や自分で計画を立てたいお客様メインの商売もしています。が、比率が全然違います。ただ、それらを伸ばしていくかなければならないとは思っています。今は、台湾やソウル、上海などを中心に伸びている、台湾であれば、ジェットスター航空などが入り安くて行けます。ただ、現状、基幹は年配者をターゲットとしたトラビックスがベースなのは否めません。

野村 リピーターができればいいですね。飛行機に関しては、客層はビジネスや観光、ホリデイ客があります。その他、ヨーロッパで完全にカテゴリーを分けられているのが *Visiting Friends & Relatives*、友人や親戚を訪ねる客層です。統計で別枠にしている、これが伸びています。だからアジアでもそれをつくっていく必要がある。企業の現地工場ができれば家族が動く。結婚すれば親が動く。誕生日や遠距離恋愛で、単身赴任者や相手のどちらかが動く。ところが、日本はお盆と正月、GWだけです。それ以外のオフタイムで、いかに人を動かすかと



増永 俊一（ますなが としかず）教授、17世紀から南北戦争以前の19世紀前半のアメリカ文学、文化を中心に研究。

いうことを考えないといけない。ヨーロッパはそれをやっている。

●観光と異文化体験

増永 中さんは堺市役所の国際部で、海外からのお客様を受け入れる立場だと思います。観光が成立するためにはニーズが必要だと思いますが、どういうニーズがあるのか。これまでのご経験で特徴的なことはありますか。外国の方が堺市に何を求めるのか、堺市の何に関心があるのか。

中 ちょうど先週もアセアン各国の方が来られていましたので、2週間の滞在中にどこを見てもらうかというのを考えました。市内企業の視

察や仁徳天皇陵古墳の観光、お茶の体験など、提供する側としては頭に浮かぶんですが、海外の方が実際にやってみて面白いと思うことはちょっと違うという話も聞いたことがあります。外部からの意見で、新しい魅力も見つけ、その意見を取り入れることが大事なことで今回感じました。

受け入れや外に行くにしても両方とも異文化体験です。小さなカルチャーショックをするつもりでいかないと、またそれが起こるのが当然と考えないと、旅や観光はなかなか定式化ができないんじゃないかと思っています。

増永 そういう方は日帰りですか。堺では泊られますか。

中 今回来られていた方々は堺で宿泊されましたが、堺だけでなく、他の地域も回られる方も多いと思います。

増永 訪問地の一つとしてくるということ？

中 そうですね。

増永 ホスピタリティという面でいえば、観光地も重要な要素ですが、宿泊施設も大切です。

増永 神戸は、高級なホテルがベイエリアに集中しています。中国からの観光客は特に水があるところが好きです。

野村 奈良とか京都では、町屋、いわゆる民宿型の外国人だけが泊るところも人気です。中須賀さんが、ハノイでどういふところに泊まったか関心がありますね。ベトナムの人口が高くなってきているので。ただ、パンフレットに載っていないのが湿度。宿泊施設のアメニティや匂いも異文化の入り口ですね。

中須賀 蒸し暑い8月に行きました。暑くてたまらなかつたです。露出を高くすれば虫に噛まれやすくなるので、半袖長ズボンで我慢しました。匂いは市場などでは強烈で、何より汚かつた。道にゴミが落ちているのは都会でも農村でも当たり前でした。宿泊施設は、オーナーがオーストラリア人のゲストハウスでした。少し欧米っぽい雰囲気は漂っていて、私は好きでした。スタッフの方も気さくでいい人たちばかりでしたが、私の部屋だけベッドのシーツがかえられていないことがありました。停電もありましたね。シャワーやトリートメントなども置いていましたが、ベトナム語で書いているので何が何かわかりませんでした。

増永 観光地としてベトナムはどうですか。

橋本 人気ですよ。昔から女性を中心に人気が非常にあります。

増永 ここに中須賀さんがベトナムに行ったときの旅程表があります。最初はハノイのホテル泊です。そのホテルでそうだったんですか。

中須賀 はい。その後はナムソン村という村に行き、村人と交流して高床式の住居に民泊という、まさに体験型の旅行でした。

北部班は全員、寝袋を持ってベトナムに行きました。南部班は反対に誰も持って行かなかつたようですが、その高床式の家で、みんなで寝袋を敷いて寝ました。私たちは60の家庭を調査させてもらいましたが、唯一その泊まらせてもらった家庭だけ水洗トイレでした。水洗トイレといつても日本のように下水道が完備されているわけではないので、出たものをお水で流す

というのが正確な表現ですが・・・。ただ、その村の村長さんの家だったので、いい家だったんだと思います。外にはシャワーもありましたが、水しか出ないと聞いて、誰一人使いませんでしたけど。虫も家の中に普通にいて、屋外と一緒にのものでした。

増永 今のお話から、愉快な思いはしなかったということが伝わってきます。これはフィールドワークですから、普通のツアーとは少し違うものだと思います。ゲストハウスというのは、どういふものでしたか。

中須賀 農村にあるゲストハウスですが、そこも正直ひどかつたです。シーツは使う前から汚くて、ここでもベッドの上に寝袋を敷いて寝ました。

野村 ありきたりの観光じゃなくて、そういう場面を見るといふのは貴重です。私がハノイで一番インパクトを受けたのは、線路の上で暮らされている方々です。市場を開いている方ですが、朝一番の電車が通り過ぎていったら、昼はそこで商売をして生きていく。あの姿には生活力がありません。

橋本 ツアーで最近流行っているのは現地暮らしです。イギリスに行けばアフタヌーンティーなどの体験で現地の人の家を訪問する。家庭訪問みたいな企画が出ています。

●若い世代の意識変化

市川 トラピックスのツアーを利用する若い旅行者のタイプが変わってきたと感じることはあ

りますか？大学の中では、留学生の受け入れを増やそうとか、学生を海外に出すことを増やそうと言っていますが、学生の動向を見ているとかなり二極分化しています。関心のある人がいる一方で、外国に行くのはストレスだから嫌だと。若い20代、大学生とかOLさんのお客様で、行き先などで変化は感じますか。

橋本 関心のある方は海外に行きますが、関心のない方も多く、国内旅行だけの方もおられます。海外に行く方には、ホテルと飛行機と足だけ付けます。観光を付けないかたちでも楽しんでいます。

市川 大学は以前と比べて留学をする人の数が減っているのを感じます。例えば、私のゼミではロシア研修をやっていて、それを売りにしています。絶対に行かせてくださいという学生がいる半面、絶対に行かないといけないんですか？必修ですか？と聞いてくる学生もいます。できるだけ多くの学生を連れていきたいとは思っています。ゼミの中でも関心のある学生、行きたくない学生で分かれてしまっています。

橋本 学生用旅行パンフレットを持ってきたのでご覧ください。

野村 売れ筋はいくらぐらいですか。

橋本 やはり10万円前後安いものです。

野村 ただ、安かろう、悪かろうというイメージでは困りますよね。

橋本 これは学生専用のツアーで、すべて20万円以内になっています。近年ではトルコが特に人気です。それは、旅行代金以外のヨーロッパ

に比べたら半額ですみます。これは現地でのショッピングやお店にいろいろ案内したりしているからなんです。とはいえ、ホテルはそんなにひどいところは入れません。

野村 O L組は？

橋本 O L組は20万円前後です。O Lさんは夏場のツアーでも20万円前後で中東系航空会社のエミレーツ航空やカタール航空を使って行く方が多いです。ヨーロッパ系航空会社のルフトハンザ航空やエールフランスなどは航空運賃が夏場は高いんです。

増永 ところで、いまのネックは、燃料サーチャージですね。

橋本 ヨーロッパでは往復で5〜6万円ぐらい。中東経由は3〜4万円です。

市川 最近は円高の話がありますが、円高で行くメリットを打ち消すぐらいに燃油が上がってしまっています。

増永 燃油代で円高の恩恵もほぼ吹っ飛んでしまふ。これが日本に来る場合だったら、円が高いうえに、燃油代はかかってしまふ。そうなるといよいよ日本の観光立国というのは危うい。その辺り、何か野村先生のお考えがあれば。

●円高の中での対応策は？
ビジネスモデルの変化が必要

野村 先ほどのAFCの構想なんかはその一つ。北海道では、台湾の方が日本でレンタカーをすぐに運転できるような運転免許制度にしようと考えています。もう一つ、これは賛否両論あり

ますが、経営難に陥っているホテルがあつて、それを外資系企業が買収し始めている状況があります。北海道内のホテルは中国系が多いと聞いています。そうすると、日本へのINが増える。中国の業者がフライトとホテルを両方抑えてくれる。日本としては雇用の創出にはつながらないけど、来てもらえるだけましみたいな考えがあります。

市川 ターゲットやマーケットが随分変わってきているので、ホテルもビジネスモデルを変えていかなければならない。日本から外に行くO UTの方の構成も熟年層のシェアが大きくなってくるし、INで迎えるアジアからの旅行者も刻々と変化していますから、そこにきちんと対応していかなければならない。ホテルにしろ、おもてなしの仕方にしろ。その場合、大手企業や観光業を構成する企業にも頑張ってもらわなといけない。ただ、やはり中央や地方政府である自治体が動かなければだめです。補助金も一つ有効な手段ですが、自治体がブランドデザインを考えることです。

野村 アジアオープンスカイ構想というのは、実はもうブランドデザインができています。ただ、それに近づくために関係者間の協力が全然できていない。国交省は国交省の言いかたをするし、空港会社は空港会社、それもターミナルビルと滑走路運営者が別になっている。関西国際空港、中部国際空港、成田国際空港だけが一体化しているけど、実は海外キャリアが飛びたいと言ったらその認可を出すのは国交省なんです。この辺りがちぐはぐで、自分で自分の首を

絞めている。

調べたところ、日本の国内線と国際線の比率を見たら中部国際空港、関西国際空港、成田国際空港、この三つだけは50〜90%。10%を超えているのは岡山空港、富山空港、新潟空港、福島空港ぐらい。要するに国内線の空港しかない。貿易、海外とつながっているのは港湾か空港しかないわけです。パッシェンジャーも貨物も。そうすると三つの空港プラスαが入っているだけ。イギリスを見たら、ロンドン・ヒースロー空港が国際線の比率が高くて、あとの空港は、実は欧州線の比率が高い。日本が何をすべきかいうと、やっぱりアジアです。LCCが飛ぶ4〜6時間の範囲、やっぱりインドシナです。インドシナまでの中で需要を開拓しないといけない。

増永 今の飛行機でいえば、小回りの効くLCCが今後はキーを握ることだと思いますか？

野村 確実に握ります。

●若い世代と観光の未来

増永 御子柴さん、中須賀さん、何か質問はありませんか？中須賀さんは旅行会社に就職したい、旅行が好きだと聞いていますが。

中須賀 阪急交通社は海外に現地スタッフを置いていますか。

橋本 海外に現地法人がありませんので、現地の会社にお世話になっています。その会社に委託をして、阪急のツアーとしてやってもらっているのが現状です。以前はアメリカやハワイに

現地法人を持っていました。本来ならあつた方がいい。現在は100%、各国のコーディネイト会社に委託をしています。ですから、旅行業は意外に現地駐在がないんです。

中須賀 もしあれば、現地で働きたい。それが夢です。

橋本 なるほど。現地採用は結構いますけどね。
増永 例えば、中さんのように地方自治体に入って観光に関与する可能性もありますね。

市川 旅と観光への関わり方というのは、旅行業界に行くというダイレクトな方法以外にも、さまざまな形で関わりを持つことはできますね。

増永 橋本さんも最初はいろいろなところを回られたということで、それでやっぱり旅行業界がいいと強く感じるかもしれない。

御子柴 中さんにお聞きます。私はこの座談会が産官学の連携だと勝手に思っています。これまでにもこういった機会はありましたか。もしなければ、こういう機会を増やしていくのが重要だと、今日の座談会で感じられましたか？
中 感じました。いろんな立場の方から、いろんな話を聞くことで、新しい発見がたくさんあると思います。

市川 御子柴さんが産官学で連携が必要だと言われましたが、官も一つの社会的組織と考えて、大学と社会全体がもっと連携をしていかなければ、学生もやっぱり何か困っている。この接点をもっと取って、観光だけじゃなくて、何に關しても。

インターネットが盛んですが、その効果は

はつきりとしていません。大学は学生の姿を企業側に知ってもらう努力をして、お互いの意見をもっと出し合うべきです。以前、中さんと私たち研究者グループはウクライナに行き学術シンポジウムに参加してきました。このような「社会人研修」の産官学連携も進めないと。

野村 確かに、観光学部とかをつくっている大学もありますよね。国交省や自治体の方にも一人旅をしてほしい。視察行ってきましたといったら、何か大名行列みたいにして行く。そうじゃなくて鉄道の上に住んでいる人を見てほしい。フィンランドだったらロシア人が大別荘を持っているのを見てもらいたい。そこを知らないと思いませんか。だから、若い人たちに本当に期待しているのです。

増永 中須賀さんが旅行記に書いていました。ベトナムの人の中には一生かけても外国に出られないような人がいると。

市川 そういう現状は、現地に行かないと分からない。やっぱり人が動かないと本当にだめだなという気がします。

野村 いろいろな面で高めなければいけない。ただ、9・11以降、その前では湾岸戦争、オイルの値上りなど、旅行業界は痛手が続きすぎています。その中で、よくやっているなと思う。でも、そうやってさまざまな工夫をしながら需要発掘をしていると思うけど、やっぱり若い人にかかっていると思う。

中須賀 今回のベトナム訪問でわかったことがあります。ゼミ内でも今までは、海外が好きな

子と海外が嫌いな子に分かれていましたが、嫌いな子も自分から積極的になっていたのはつきり見えました。頑張って英語をしゃべろうと。実際に、友達でTOEICの点数が悪い子がいますが、その友達も積極的に英語で話かけていました。大事なのはやっぱり心です。

市川 そうなのは実際にベトナムに身を置いたからだだと思います。それが大事で、まず一歩踏み出して、異文化の中に身を置いて、それから自分が刺激を受けてどういうふうに関わっていくのか。うちのゼミも同じです。ロシアに行くのと英語を勉強しようというインセンティブが上がります。帰国後もロシアの学生と英語でコミュニケーションないといけないんです。

増永 旅に出るということはさまざまな動機があります。気分を変えることがベースにあると思います。疲れたら旅に行きたいです。もう一つは体験型。それは異文化を知ることです。若いうちにどんな世界を見ようということです。それから、最初の方で問題提起しましたが、日本の国家の将来を考えるのであれば、海外からお客さんに来てもらってサービスマンとして観光が栄えていかないと、日本の経済もうまく回らないのではないかと。旅と観光、あるいはツーリズムというのは非常に大きな問題ですが、面白い話題であるのではないかと改めて思います。

日本は観光立国としてやっていける素地は十分あると思います。それは日本には歴史や観光地、ホスピタリティもあるんです。今日の話ではこれまで出ませんでした。旅の一つの原型

は「巡礼」です。

●巡礼と観光

旅文化先進国、日本

市川 お蔭参りとか伊勢参りです。

増永 あとはお遍路です。おそらく、中高年の方に人気があると思います。神埼憲武さんが書いた『江戸の旅文化』（岩波新書、2004）という本がありますが、これは伊勢神宮への伊勢参りの話です。巡礼の旅。巡礼なんてけど同時にレジャーなんです。

市川 お伊勢参りという言い方をしないと、江戸時代だと勝手に自分の住んでいるところを離れられない。お伊勢参りという言い方でお墨付きをもらうわけです。お参りが終わったらそれで帰るんじゃないで、付け足しの観光旅行をするんです。それがまた、楽しみなんです。

増永 歴史的には、その辺でインフラが整備されていったんです。例えば旅籠、それから、「御師」（おんし、おし）です。これがT.Aの走りだと言われています。

18世紀の話ですが、よくトーマス・クックがT.Aの最初だと言われています。それよりも1世紀も前にそういうものが日本にあったんです。また、御師はちゃんと営業活動をするんです。今度また来てくださいます。日本ではそういう旅文化の蓄積があるのではないかと。

市川 それこそ経済発展論や経済史の大きなテーマです。歴史というのは、断絶とつながりの両面があって、近代にツーリズムが日本で早

く定着することができたのは、江戸時代までのそういう経験があるからなんです。もちろん、江戸時代の旅のスタイルがそのまま明治にいくのではなく大きな変化はある。だけど、ゼロではないから、さまざまなものが外国から輸入してきたわけです。旅のスタイルにするのに、江戸時代のお伊勢参りで旅の楽しみを知った日本人というのは、結構大きい。

増永 それが、莫大な金を使っている。旅行積立金みたいなかたちで長年お金を貯めて、行けない人にお裾分けしたのが、現在も残る日本のお土産文化の原点だったりもする。

市川 先ほど、大きいホテルがだめになって外資が入ってきているという話が野村先生からありました。それは日本の旅文化の歴史からすると、努力が足りなかった部分だと思います。今の日本のホテル業界の現状は、航空会社系、鉄道系の親会社があつて子会社としてホテルを運営している。つまり親会社から派遣されて、ホテルのプロでない人がホテルの経営者に携わっています。これが外資系のホテルとの違いです。だから、日本は江戸の旅文化があつたにも関わらず、ホテル業界に関しては真つ当なやり方をやってこなかった。

御子柴 今回のお話を聞いていて、学生に対するメッセージとか、学生がどういうふうに関わっていきけるのかなという部分が気になります。学生に対するメッセージと、旅行会社の立場と役所の立場で、学生にこれから、どういふふうに関わってほしいか、逆に学生にこいういふふうに関わってほしいかという、メッセージ

ジをお聞かせください。

●まずは行動を

その経験がどこかで繋がる

橋本 もっと学生とたわむれたいなと思つています（笑）。こういう機会があれば来ますし、ゼミとか呼んでくれたらいつでも行きます。自分の経験しか話せませんけど。10年ぐらい社会人としてやってきて、それなりの経験はしてきただつたりです。特別ゲストかなんかで呼んでくれたら、喜んで来ますよ。

野村 ぜひ、学生主催でやってほしい。

中 今日は色々な話が聞けてすごく楽しかったです。機会があればまた呼んでほしいです。学生の時はないと思うかもしれないですが、自由に使おうと思つたら使える時間がほんとにたくさんあると思います。どんなつまらないと思うことでも一所懸命やってほしい。それがいい経験になる。役所は一つの事業でもいろいろ方面に関わつたりするのが面白いので、何でも興味を持ってやっておけば、どこでどう、それが生きてくるのか分らないというのがあると思います。私もそれだけは忘れないようにしてやっていこうと思つています。

増永 そのときは分らないっていうことはたくさんありますよ。あとで、気が付くということもありますから、まずは体験するというか、行動力が必要です。

野村 橋本さんがすごいなと思つたのは、学生時代にウインブルドンとか海外のスポーツ試合

を自分で見に行っている。だから、旅行会社に行くのは当たり前だと。現役の学生にはそういう経験をしてほしい。

増永 今日はむしろ積極的に前に出ていこうというお二人に来てもらっているので、こういうことを一つの触媒として、他の経済学部生にどんどん伝えてほしいです。

市川 積極派のお二人から、その仲間たちに発信してもらいたい。こういう経験したと。自分と話が合う人にするんじゃないかと、『ECONO FORUM』などいろんな媒体を通じて。ツイッターでもフェイスブックでもいい。

増永 この座談会の記事を読んで、学生が少しでも刺激を受けてくれればいい。こういうこと、こんなことが書いてあるよということを話題にしてもらいたいと思います。

今日はそれぞれに刺激的な話ができただけなのではないかと思っています。お忙しい中、上ヶ原まで足を運んでくださった橋本さんと中さんに改めてお礼を申し上げ、座談会を終わりたいと思います。ありがとうございました。
(終了)

